

> 易は象を立てて意を尽くし、華嚴は事に託して法を表す。所謂、「一塵が法界を含み、含容するのが無量である。」というのはその中にある。二書が象を立て、法を表して人に見せようとするのは、まさにこのためである。それを分けて二つにはいけない。華嚴の「法界不可窮」と易の「自乾坤以下」は元々一つの理である。世間と出世間も元々一つの道である。>

朝鮮時代の排仏論が中国、特に朱子の排仏論に大きく影響されていることは言うまでもない。しかし、排仏論に対して反論した文献は数少ない。その原因は中国より朝鮮時代の仏教がもっと厳しい状況にあり、反論する余裕も力量もなかったためであろう。その数少ない文献の中で一つが『儒釈質疑論』である。

『儒釈質疑論』は同じ時代の『顕正論』に比べ非常に理論的で、哲学的な文献である。特に、釈迦の入胎、誕生課程と仏の手印を『周易』に対応させて論じたのはあまり例を見ない所である。

## 初期大乘仏教の三昧思想

朴一黙<駒澤大学博士課程>

1. はじめに
  2. 三昧・禅・止観
  3. 般舟三昧
  4. 首楞嚴三昧
  5. まとめ
- \* 略号一覧

### 1. はじめに

三昧は仏教興起以前から、広くインド一般の宗教における伝統的な実践法であるのみならず、仏教においても実践の中心となる必須の実践徳目であった。その起源らしきものが、古くインド原住民の中にみられ、インダス文明の遺跡の一つ、モヘンジョダロの出土品中から三昧をかたどった印章が発見されている<sup>1</sup>。

ブッダは六年間の苦行や三昧の実践をし、ある時菩提樹下で正覚を成就し、七日間、三昧に入って解脱の喜びを感受した後、その三昧から出て、縁起の法を観じた。そのとき、彼は「実に熱心に禅をなすバラモンに、ダンマが顕わになるとき、そのとき、彼は縁起の法を了知するが故に、一切の疑惑が消え去る」という目覚めの詩をとねたと伝えられる<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 田上太秀[1980]『禅の思想』東京書籍, pp.15-19.

<sup>2</sup> *Ud*, I, p.1.

ブツダの教えを直接に受け継いだ初期仏教での三昧は、三学の一つとして、八正道の最終徳目として、さらに五根、五力、七覚支、四如意足などに一項目として加えられ、出家修行者が解脱・涅槃に至るための実践徳目であった。

初期仏教経典の随所に見られる三昧実践法は、四禅、四無色定、想受滅定の外、三三昧、四念処、五停心観、四十業処、八解脱、八勝処などであるが、これらは多く部派仏教において系統的段階的に分類され、詳しく示されている。

後に興起してきた大乘仏教における三昧の実践は、そのような伝統を受けつつ、菩薩の基本的な実践徳目である六波羅蜜の第五禅定波羅密として知られている。大乘仏教経典には経典の数に比べられるほどの多くの三昧の名称があげられており、三昧をテーマにする経典が多く漢訳されている。これらの経典は、初期仏教経典とは明らかに異なり、それぞれ独自の三昧の世界が展開される。

大乘経典は必ずブツダが何れかの三昧に入って説くとされている。たとえば、般若経は三昧王三昧に、法華経は無量義処三昧に入って説かれ、華嚴経は海印三昧に、涅槃経は不動三昧に入って説かれたとされる。すなわち、ブツダ自身が三昧に入り、縁起という真理を如実知見し、そこからよみがえってきた真実を語り出すということである。または、三昧の中でブツダにまみえ、威神力・加持力を受けてブツダから「如是我聞」したものを説くということである。

たとえば、初期『涅槃経』にはブツダは四禅に入られてから最上の安楽の境地である涅槃に入られたということだけが説かれており、死んでいるとは説明されていない。これを受継いで、『首楞嚴三昧経』は、ブツダは方便として涅槃を示すだけであり、永遠に涅槃に入ることがないと説く。さらに大乘『涅槃経』にいたっては、ブツダは「私は死んでいない」と宣言する。すなわち大乘経典とは、正覚を成就した現在のブツダが大いなる三昧の世界に入って説法したものであったのである。

大乘の諸経典の中に種々の名称をもって三昧が説かれる中で、その中心となる

yaḍā have pātubhavanti dhammā ātāpino jhāyato brāhmaṇassa ath'assa kaṅkhā vapayanti sabbā yato pajānāti sahetudhamman ti //1//

玉城康四郎[1977]『原始経典の冥想試論』『禅学論攷』, p.31. 玉城康四郎氏はダンマを無形態の純粹生命と捉え、三昧にダンマが頭わになることによってさとりが実現するのであると解釈する。

実践法は、三昧中に普遍なるブツダにまみえ、そしてそのブツダから教えを受けるといふ見仏三昧が基本的な特色としてあげられる<sup>3</sup>。この三昧は『般舟三昧経』で具体的に説かれているが、それに限らず他の経典にも深く関わっている。

たとえば、般若経には、法による見仏が見られる。『小品般若経』に、「須菩提よ、若し菩薩、般若波羅蜜を行じ、般若波羅蜜を生ずるの時、念に依じて無量無辺の世界の諸仏現前する。諸仏の薩波若智、皆、般若波羅蜜より生ず。」<sup>4</sup>と説かれる上、『道行般若経』及び小品や大品系般若経のいずれにも経の末尾におかれている「常啼(Sadāprarudita 薩陀波崙)菩薩品」では、般若波羅蜜の教えを求める常啼菩薩があらゆるブツダにまみえるという「見十方諸仏三昧」を実践する、という内容の教説が示される<sup>5</sup>。

『華嚴経』には、法、あるいは念仏による見仏が見られる。たとえば、「諸法のことを解すれば、常に諸仏は現前す」<sup>6</sup>、または「念仏三昧を得たならば、常に十方の仏を見るであろう<sup>7</sup>」とある。

「入法界品」において、最初に訪ねた功德雲比丘の教えが念仏三昧であることや<sup>8</sup>、解脱長者があらゆる方向に、あらゆる世界において、如何なるブツダをも見ることができるといふことや<sup>9</sup>、善財童子のさまざまな発心の一つに、あらゆる仏にまみえるためであるといふことが含まれていることから<sup>10</sup>、この経の教えが現在十方の諸仏にまみえてその教えに接することであることが理解される。

「十地品」は金剛藏菩薩が仏の加持力を受けて大智慧光明三昧に入り、三昧の中で無数の金剛藏如来にまみえ、十地を説法すべく加護を受ける。その三昧

<sup>3</sup> 大南龍昇[1977]「見仏—その起源と展開—」『大正大学研究紀要』63, pp.25-40.

<sup>4</sup> 須菩提。若菩薩行般若波羅蜜。生般若波羅蜜時。應念現在無量無邊世界諸佛。諸佛薩婆若智。皆從般若波羅蜜生。(T8.579a)

<sup>5</sup> 薩陀波崙菩薩從化佛聞是教。即踊躍歡欣。用歡欣踊躍故。即得見十方諸佛三昧。(T8.472a) 是時間師名聲。大歡欣踊躍不能自勝。用歡欣踊躍故。即得悉見十方諸佛三昧。(T8.473b ~ 473c) (Aṣṭ. Pr., p.243)

<sup>6</sup> 若能如是解。諸佛常現前。無取亦無見。空寂無真實。(T9.442b)

<sup>7</sup> 若念佛定不可壞。則常睹見十方佛。(T9.433c)

<sup>8</sup> Gv., pp.48-49.

<sup>9</sup> Ibid., p.66.

<sup>10</sup> Gv., p.63.

より出て、十地の説法がはじまるのである。十地の各地において、三昧を得て、諸仏にまみえるという定型句が説かれている。第一地の歡喜地の場合、「出家するや、ただ一瞬のごく僅かの間に、百の三昧を得て、百の諸仏にまみえる」<sup>11</sup>とあり、菩薩の階位が高くなるにつれて、ますます得られる三昧の数も増え、それに比例する諸仏にまみえることになる。第十地の法雲地の場合、「勇猛精進するや、ただ一瞬のごく僅かの間に、言葉でいえないほど無数の十百千億兆の仏国土にある原子の微粒子数に等しい三昧を得て、言葉でいえないほど無数の十百千億兆の仏国土にある原子の微粒子数に等しい諸仏にまみえる」<sup>12</sup>と説かれ、三昧の境地が深まってゆくにつれて、ブツダとの不二の境地に近づけることを物語っていると考えられる。

『法華経』は信による見仏が見られる。仏像に一本の華を供えただけでも多くのブツダにまみえるのであり<sup>13</sup>、ブツダの寿命の長遠なることを聞いて深く信受するならば、ブツダが靈鷲山に在って菩薩衆・声聞衆にかこまれ、法を説いているのを見るであろう<sup>14</sup>、とある。その他に、三昧中の見仏や夢中見仏も説かれている<sup>15</sup>。

浄土經典の『大阿彌陀経』や、『般舟三昧経』はじめ『月灯三昧経』『坐禅三昧経』『観仏三昧経』などの三昧をテーマにする經典において、基本的に念仏による見仏三昧が説かれ、大乘菩薩の実践法の基調となっている。

本論では、先ず初期仏教の中で、三昧の意味やその実践法を探る。その上で従来の仏教を批判して起こった初期大乘仏教における三昧の意味・実践法を、般舟三昧と首楞嚴三昧をとりあげ、検討し、そこから大乘仏教特有の思想を導く。

<sup>11</sup> Daśabhūmi., p.30.

<sup>12</sup> Ibid., p.199.

<sup>13</sup> 若人散亂心。乃至以一華。供養於畫像。漸見無數佛。或有人禮拜。或復但合掌。乃至舉一手。或復小低頭。以此供養像。漸見無量佛。(T9.9a)

<sup>14</sup> 若善男子善女人。聞我說壽命長遠深心信解。則為見佛常在耆闍崛山。共大菩薩諸聲聞衆圍繞說法。(T9.45b)

<sup>15</sup> 又見諸佛。身相金色... 諸佛身金色。百福相莊嚴。聞法為人說。常有是好夢。(T9.39b~39c)

## 2. 三昧・禪・止観

初期仏教經典において、精神統一をはかる意味の言葉として、よく知られているように、三昧(samādhi)、禪(dhyāna/jhāna)、ヨーガ(yoga)が厳密な区別なしに同義語として使われてきたようである。止観という語は、最初期仏教には見られないが、五部ニカーヤ・四阿含經典の後期のものに現われ、アビダルマ文献で細かく追求されるにいたった純粹の仏教用語であり、三昧や禪の内容を表すものである。

samādhi は sam+ā+√dhā よりきた男性名詞で、定める、集中する、置くことを意味する。等持、音写して三昧とも訳される。dhyāna は √dhyai の中性名詞で、考える、専心することを意味し、思惟修、静慮と訳される。これら二語は何れも定と訳される。従来から定の七名として、samāhita(等引)、samādhi(等持)、samāpatti(等至)、dhyāna(静慮)、cittaikāgratā(心一境性)、śamatha(止)、dr̥ṣṭadharmasukhavihāra(現法樂住)などが伝えられる。その他に、citta(心)、catasso appamaññāyo(四無量心)、bhāvanā(修習)、vimokkha/vimokha(解脱)、sati(念)、saññā(想)、pallankena nisīdati(結跏趺坐)、恍惚などの種々なる言葉を使って三昧・禪の内容を表している<sup>16</sup>。

三昧や禪の意味を、初期經典よりみると、

心一境性(cittassa ekaggatā)が三昧である。四念処が三昧の相であり、四正勤が三昧の資具である。それら諸法の練習、修習、復習が三昧の修習である<sup>17</sup>。

と定義される。『清浄道論』では、「等持の義によって定となす。一境に対して、

<sup>16</sup> 藤田宏達 [1972] 「原始仏教における禪定思想」『佐藤博士古稀記念仏教思想論叢』、山喜房仏書林、pp.300-303。田上太秀 [1980]、pp.46-47 などに禪を表す言葉に対する説明や用例が述べられている。

<sup>17</sup> MN. I, p.301, T1, 788c.

Yā kho āvuso Visākha cittassa ekaggatā ayaṃ samādhi, cattāro satipaṭṭhānā samādhinimittā, cattāro sammappadhānā samāधिparikkhārā, yā tesam yeva dhammānaṃ āsevanā bhāvanā bahulikammaṃ ayaṃ tattha samāधिbhāvanā ti.

心心所を平等に正しく保持すること(samaṃ sammā ca ādhānaṃ)である。」<sup>18</sup>と説かれ、『俱舍論』においても、「三摩地とは謂わく心一境性なり。」<sup>19</sup>とあり、心を一つの対象に集中した状態、または置くことをあらわす語として用いられている。

最初期經典である『スッタ・ニパータ』や『ダンマ・パダ』には、三昧が断片的に説かれているのみであるが、その実践を重視している傾向が強く示されている。たとえば、『ダンマ・パダ』に、「慧のないものには禅がなく、禅のないものには慧がない。禅と慧をそなえたものは、涅槃の近くにいる。」<sup>20</sup>とあるように、修行要項の骨格として説かれている。すでに止観に相応する内容が先取られていたと考えられる。

五部ニカーヤ・四阿含經典にいたって、三昧の実践法が系統的段階的に深まり、さまざまな三昧が規定され、詳しく説かれるようになる。そのような初期經典に現われる三昧の実践は、戒定慧からなる三学の定学として、苦集滅道からなる四聖諦の道諦である八正道の第八支の正定として、実践徳目の基本になっている。初期經典のいたるところで、三昧の実践によって四聖諦を如実に了知するものであると強調される。たとえば、

samādhim bhikkhave bhavetha, samāhito bhikkhave bhikkhu yathābhūtaṃ pajānāti.  
比丘たちよ、三昧を修習せよ。比丘たちよ、三昧を得る比丘は如実に了知する。  
kiñca yathābhūtaṃ pajānāti.  
何を如実に了知するのか。  
idam dukkhan ti pajānāti. ayam dukkhasamudayo ti yathābhūtaṃ pajānāti. ayam

<sup>18</sup> *Vism.*, p.84.

Samādhānaṭṭhena samādhī. Kim idaṃ samādhānaṃ nāma? Ekarammaṇe cittacetāsikānaṃ samaṃ sammā ca ādhānaṃ ṭhapanan ti vuttaṃ hoti; tasmā yassa dhammassānubhāvena ekārammaṇe cittacetāsikā samaṃ sammā ca avikkhipamānā avippakiṇṇā ca hutvā tiṭṭhanti, idaṃ samādhānaṃ ti veditaḅbaṃ.

<sup>19</sup> 勝解謂能於境印可 三摩地謂心一境性 諸心心所異相微細 一一相續分別尚難 (T29.19a)

<sup>20</sup> *Dhp.* 372.

N'atthi jhānaṃ apaññassa paññā n'atthi ajjhāyato, yamhi jhānaṃ ca paññā ca, sa ve nibbāṇasantike.

dukkhanirodhdo ti yathābhūtaṃ pajānāti. ayam dukkhanirodhagāmini paṭipadā ti yathābhūtaṃ pajānāti.

これは苦であると了知し、これは苦集であると如実に了知し、これは苦滅であると如実に了知し、これは苦を滅する道であると如実に了知する<sup>21</sup>。

さらに他の箇所では、

samādhim bhikkhave bhavetha, samāhito bhikkhave bhikkhu yathābhūtaṃ pajānāti.  
比丘たちよ、三昧を修習せよ。比丘たちよ、三昧を得る比丘は如実に了知する。  
kiñca yathābhūtaṃ pajānāti.  
何を如実に了知するのか。  
rūpassa samudayaṃ ca atthagamaṃ ca, vedanāya samudayaṃ ca atthagamaṃ ca, saṅkhārānaṃ samudayaṃ ca atthagamaṃ ca, viññānaṃ samudayaṃ ca atthagamaṃ ca.  
色の生起と滅であり、受の生起と滅であり、想の生起と滅であり、行の生起と滅であり、識の生起と滅である。

とある。このように知り、このように見ることによって、「煩惱より解脱して、解脱したという智が生じ、“生まれは尽き、梵行は完成された。なすべきことはなされた。もはやこの生にくることはない”と了知する。<sup>22</sup>」という定型句が説かれている。だから samādhī と yathābhūtaṃ pajānāti とはセットになって表現されており、道理を認知し如実に了知するには三昧が不可欠の条件とされている。

したがって經典では、「縁起を觀る者は法を觀、法を觀る者は縁起を觀る<sup>23</sup>」と説かれる。pajānāti とは、大乘仏教でいう prajñā すなわち般若的認識に相当するとされる<sup>24</sup>。

<sup>21</sup> *SN.V*, p.414. T.2, 112a の四二八番目の經典に対応する。その他にも *SN.III*, p.13. *MV*. I, p.249/413; II, pp.38-39.

<sup>22</sup> *DN*. I, p.84.

<sup>23</sup> *MV*. I, p.191. T.1, 467.

Yo paṭicasamuppādaṃ passati so dhammaṃ passati, yo dhammaṃ passati so paṭicasamuppādaṃ passati.

<sup>24</sup> 丘山新 [2003] 「冥想の思想史」『アジア学将来像』, 東京大学東洋文化研究所編, p.128. 彼の説に同意する。

八正道においても正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念などの七支は正定を生ずるための予備、または前提に過ぎないと見なされる。すなわち、

比丘たちよ、縁と資助を伴った聖なる正定とは何か。それは、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念である。

比丘たちよ、これら七支によって用意された心一境性がある。比丘たちよ、これが縁と資助を伴った聖なる正定であるといわれる<sup>25</sup>。

とある。涅槃にいたるための八正道を実践する方法として正定が中心になっており、三昧の実践によってこそ如実知見が得られ、涅槃が実現されるということである。

三学の定学においても、八正道の正定においても、その実践法の内容にすべて四禪が説かれている<sup>26</sup>。したがって、これが三昧実践法の最も中心であり、且つ古い形であると一般に認められている。

四禪は仏教以前から、インド一般の三昧の実践法であったものが仏教に採用されたものであるという説に加え<sup>27</sup>、最初期經典にその原型がみられる仏教独自の説であるという主張も出たが<sup>28</sup>、仏教外の要素を含んでいながら、仏教内で体系化されたものであるとみられる。

<sup>25</sup> MN.III, p.7. SN.V, p.21. DN.II, pp.216-217.; III, p.252.

Katamo ca, bhikkhave, ariyo sammāsamādhī sa-upaniso sapaṅkhaṅhāro? seyyathidaṃ : sammādiṭṭhi sammāsaṅkappo sammāvācā sammākammanto sammā-ājīvo sammāvāyāmo sammāsati. Yā kho, bhikkhave, imehi sattāngehi cittassa ekaggatā parikkhatā, ayaṃ vuccati, bhikkhave, ariyo sammāsamādhī sa-upaniso iti pi, sapaṅkhaṅhāro iti pi.

<sup>26</sup> DN.I, p.73.; II, p.304.; III, p.132. SN.V, pp.8-10. MN.III, p.252.

<sup>27</sup> 宇井伯寿 [1965] (再刊)『印度哲学研究』第三,岩波書店, p.21. 赤沼智善 [1981] (複製版)『原始仏教の研究』, pp.109-110. 増永靈鳳 [1948] 『根本仏教の研究』, 風間書房, pp.238-239. 水野弘元 [1956] 『原始仏教』, 平楽寺書店, p.223. 藤田宏達 [1972], p.306.

<sup>28</sup> 金児黙存 [1957] 「四禪説の形成とその構造—原始仏教に於ける実践—」『名古屋大学文学部研究論集』哲学6, p.123 以下. 高瀬法輪 [1971] 「四禪説の一考察」『印度学仏教学研究』13-1, pp.202-205.

この四禪については、定型的な説明がなされている。

諸欲を離れ、諸不善法を離れ、尋(savitakkaṃ)があり、伺(savicāraṃ)があり、離より生じる喜と楽とがある初禪(paṭhama-jhāna)に達して住する。

尋と伺とが消え、内心清浄になり(ajjhataṃ sampasādanaṃ)、心が統一し(cetaso ekodibhāvaṃ)、尋がなく、伺がなく、三昧(samādhijaṃ)より生じる喜と楽とがある第二禪(dutiya-jhāna)に達して住する。

喜を離れて捨(upekkhako)に住し、正念正知にして(sato ca sampajāna)、身体に楽を感受し、聖者たちがいう「捨にして念ある楽住」という第三禪(tatiya-jhāna)に達して住する。

楽を断ち、苦を断ち、すでに喜と憂とを滅しているから、不苦不楽にして、捨によって念が清浄になる(upekkhāsati pārisuddhaṃ)第四禪(catuttha-jhāna)に住する<sup>29</sup>。

これら四禪は心一境性の概念に基づいて、四段階に分かれて精神が純化していく過程を表したものである。初禪は微妙な思惟が残っている段階、第二禪は思惟作用が消滅し、三昧の喜・楽のみがある段階、第三禪は喜が消え、とらわれない心によって正念正知が得られ、楽のみある段階、第四禪は苦楽喜憂の感覚作用が完全に消滅し、純粹の内観のみが残る段階である。第四禪にいたって、はじめて涅槃への確かな道が得られるのである。

初期仏教經典には、四禪のほか、さまざまな三昧実践法が説かれているが、そのなかでよく知られているのが、四無色定、想受滅尽定である。最終的にこれら三つがまとめられて九次第説と呼ばれる。

次に止観について触れてみよう。止(samatha/samatha)と観(vipaśyanā/vipassanā)は初期仏教の古層經典においては、関係なしに別々に説かれる<sup>30</sup>。止とは samatha

<sup>29</sup> MN.III, pp.235-237.; V, p.10. MN.I, p.247/347/412.; II, pp.15-16/37.; III, p.4/252/162. DN.I, p.73. AN.IV, pp.440-442.

<sup>30</sup> Sn. 732.

Etam ādinavaṃ ñatvā dukkhaṃ saṃkhārapaccayā sabbasaṃkhārasamathā saññāya uparodhanā evaṃ dukkhayo hoti, — etaṃñatvāyathātathaṃ.

Therag. 112.

tevijjo 'haṃ mahājhāyi cetosamathakovidō ;

の訳語で、三昧と同一の意味に用いられ、三昧によって得られる心の静止・寂靜の状態をあらわす<sup>31</sup>。たとえば、『スッタ・ニパータ』に、「いままで経験した苦樂と、喜びと憂いとを捨てて、清らかな無關心(upekā)と静止(samatha)とを得て、犀の角のように一人で歩みなさい。」<sup>32</sup>と、説かれている。

観とは vipaśyanā の訳語で、正しい認識を意味し、止に基づいて世間の真実の姿を観るということで、智慧をあらわす。観法、ときには音写して毘鉢舍那と訳される。『スッタ・ニパータ』によると、「無所有ができることであり、快樂が束縛であると、それぞれ知って、それから、それについて観察する(vipassati)。

〔修行を〕成就したそのバラモンにはこの真実の智慧があると<sup>33</sup>とある。

五部ニカーヤ・四阿含經典において、止観の語は多く見出し得る。先に触れたように、止は三昧の心一境性をあらわし、その状態より得られる正知見の観察作用を観という。したがって第四禪が止観均等の状態であるといわれ、四禪が止の実践の最も基本的なものであると考えられている。初期經典をみると、止観均等が強調されている。

友よ、比丘が止に次いで観を修する。止に次いで観を修する彼には道が生ずる。そ

sadattho me anuppatto, kataṃ buddhassa sāsananti.

*Therag.* 584.

samathaṃ anuyuñjeyya kālena ca vipassanaṃ.

*Dhp.* 94.

yass' indriyani samathaṅgatāni, assā yathā sārathinā sudantā devāpi tassa pihayanti tādino.

*Dhp.* 174.

andhabhūto ayaṃ loko tanuk' ettha vipassati, sakunto jālamutto va appo ssaggāya gacchati.

<sup>31</sup> 藤田宏達[1972], p.300. 中村元[1975]「原始仏教における止観」『止観の研究』(関口真大編), 岩波書店, pp.36-37

<sup>32</sup> *Sn.* 67.

Vipitthikatvāna sukhaṃ dukhañ ca pubbe va ca somanassadomanassaṃ

laddhān' upekkhaṃ samathaṃ visuddhaṃ eko care .....

<sup>33</sup> *Sn.* 1115.

kiñcaññāsambhavaṃ ñatvā 'nandī saṃyojanaṃ' iti evaṃ evaṃ abhiññāya tato tatha vipassati, cetaṃ ñānaṃ tathaṃ tassa brāhmanassa vusīmato<sup>34</sup>ti.

の道を習い、修し、多く実践することによって、諸の結縛が断たれ、随眠は遠ざけられる。

友よ、比丘が観に次いで止を修する。観に次いで止を修する彼には道が生ずる。その道を習い、修し、多く実践することによって、諸の結縛が断たれ、随眠は遠ざけられる。

友よ、比丘が止と観とを一双にまとめて修する。止と観とを一双にまとめて修している彼には道が生ずる。その道を習い、修し、多く実践することによって、諸の結縛が断たれ、随眠は遠ざけられる<sup>34</sup>。

止と観とは、それぞれ修習されるべき実践法であるが、しかし止によって観が修習され、観によってより高次の止が得られるというように、この二者は相互に修習されるものであって、バランスよく相応することによって、止観が和合し、均等にはたらくのである。

この見解は大乗仏教に継承され、『瑜伽師地論』には、止を正しく行ずることによって、観が引発され、さらに観を修することによって、如実覺了が引発されると説かれている<sup>35</sup>。

さらに經典では、正見を正見たらしめるものに五支があり、その五支とは、戒・聞・対論・止・観である。正見はこれら五支に支えられて、心解脱・慧解

<sup>34</sup> *AN.* II, p.157. T2, 146c.

Idha āvuso bhikkhū samathapubbaṅgamaṃ vipassanaṃ bhāveti, tassa samathapubbaṅgamaṃ vipassanaṃ bhāvayato maggo sañjāyati. So taṃ maggaṃ āsevati bhāveti bahulīkaroti. Tassa taṃ maggaṃ āsevato bhāvayato bahulīkaroto saññojanāni pahiyanti anusayā vyantihonti. Puna ca paraṃ āvuso bhikkhu vipassanāpubbaṅgamaṃ samathaṃ bhāveti, tassa vipassanā-pubbaṅgamaṃ samathaṃ bhāvayato maggo sañjāyati. So taṃ maggaṃ āsevati bhāveti bahulīkaroti. Tassa taṃ maggaṃ āsevato bahulīkaroto saññojanāni pahiyanti anusayā vyantihonti.

Puna ca paraṃ āvuso bhikkhu samathavipassanaṃ yuganaddhaṃ bhāveti, tassa samathavipassanaṃ yuganaddhaṃ bhāvayato maggo sañjāyati. So taṃ maggaṃ āsevati ... bahulīkaroti. Tassa taṃ maggaṃ āsevato ... bahulīkaroto saññojanāni pahiyanti anusayā vyantihonti.

<sup>35</sup> 瑜伽師地論卷第十三「本地分中三摩呬多地」若於毘鉢舍那善修習已。即能引發於諸法中如實覺了。(T30.341a~341b)

脱という果になるとも説かれている<sup>36</sup>。このような見解から、八正道の第八の正定を止に、第一の正見を観に、たとえることもあり、三学の定と慧が止と観に相当するともいわれる。

『成実論』巻15「止観品」は、「止を定に名づけ、観を慧に名づける」と定義している<sup>37</sup>。

止と観とを実践することによって得られる、それぞれのはたらきはどのようなものであるか。経典は次のように語る。

比丘たちよ、明智を助成する(vijjābhāgiya)二法がある。その二法とは何であるか。止と観とである。比丘たちよ、止を修習して何が成就されるのか。心が修習される。心を修習して何が成就されるのか。あらゆる貪欲が断たれる。

比丘たちよ、観を修習して何が成就されるのか。慧が修習される。慧を修習して何が成就されるのか。あらゆる無明が断たれる。

比丘たちよ、貪欲に汚された心は解脱しない。無明に汚された慧は修習されない。

比丘たちよ、このように、貪欲を離れることより心解脱し、無明を離れることより慧解脱する<sup>38</sup>。

<sup>36</sup> MN.I, p.294.

Idh' āvuso sammādiṭṭhi silānuggahitā ca hoti sutānuggahitā ca hoti sākacchānuggahitā ca hoti samathānuggahitā ca hoti vipassānānuggahitā ca hoti. Imehi kho āvuso pañcahi āgehi anuggahitā sammādiṭṭhi cetovimuttiphala ca hoti cetovimuttiphalañisaṃsā ca, paññāvimuttiphala ca hoti paññāvimuttiphalañisaṃsā cāti.

<sup>37</sup> 「問曰。佛處處經中告諸比丘。若在阿練若處。若在樹下若在空舍。應念二法。所謂止觀。若一切禪定等法皆悉應念。何故但說止觀。答曰。止名定觀名慧。(T32.358a)

<sup>38</sup> AN. I, p.61. T.2, 190b.

Dve 'me bhikkhave dhammā vijjābhāgiya.

Katame dve?

Smatho ca vipassanā ca. Smatho ca bhikkhave bhāvito kam attham anubhoti? Cittaṃ bhāvīyati.

Cittaṃ bhāvitaṃ kam attham anubhoti? Yo rāgo so pahīyati.

Vipassanā bhikkhave bhāvita kam attham anubhoti? Paññā bhāvīyati. Paññā bhāvita kam attham anubhoti? Yā avijjā sā pahīyati; rāgupakkiliṭṭhaṃ vā bhikkhave cittaṃ na vimuccati avijjupakkiliṭṭhaṃ hāva paññā na bhāvīyati. Imā kho bhikkhave rāgavirāgā cetovimutti avijjāvirāgā paññāvimutti ti.

これ以外にも、止観のはたらきについて、無為に達する道(asāṅkhatagāmi maggo)<sup>39</sup>、貪瞋癡を了知すること<sup>40</sup>、四聖諦の理を如実に観察すること<sup>41</sup>、四禪・四無量・四無色定に入り、六神通を得ること<sup>42</sup>などと相応して説かれる。

このように初期経典に現われる止観は、従来インドに伝えられてきた四禪を中核とする三昧実践法の諸徳目を、そのまま包含して基盤としたものであり、心一境性のみが目的視された三昧法が止観にいたって、諸欲と無明を離れ、如実知見を得、涅槃を実現するための道としての性格を示すものとして、新しい意味を有することになったのである。

### 3. 般舟三昧

般舟三昧は、『般舟三昧経』に説かれる見仏するための三昧法のことである。本経は初期大乘仏教の三昧をテーマとする経典群の一つである。現存する『般舟三昧経』は漢訳四本とチベット語訳、僅かな断片のサンスクリット本が知られるだけである。

漢訳四本を以下に挙げる。

①『般舟三昧経』三巻 後漢、支婁迦讖訳(以下『三巻本』と略称する)

②『仏説般舟三昧経』一卷 後漢、支婁迦讖訳(以下『一卷本』と略称する)

③『拔陂菩薩経』一卷 訳者不明、(以下『拔陂経』と略称する)

④『大方等大集経賢護分』五巻 隋、闍那崛多訳(以下『賢護分』と略称する)

<sup>39</sup> SN. IV, pp.362-368.

<sup>40</sup> AN. I, p.100.

Samatho ca vipassanā ca. Rāgassa bhikkhave abhiññāya ime dve dhammā bhāvetabbā ti. Dosassa mohassa kodhassa upanāhassa makkhassa palāsassa issāya macchāriyassa māyāya sāttheyyassa thambassa sārāmbhassa mānassa atimānassa madassa pamādassa abhiññāya pariññāya parikkhāyāya pahānāya khayāya vayāya virāgāya nirodhāya cāgāya paṇinissaggāya dve dhammā bhāvetabbā.

<sup>41</sup> SN.III, p.13.; V, p.414. T2, 16/21.

<sup>42</sup> MN. I, p.295. T2, 246.

Paul M. Harrison によって、チベット語訳がローマ字で校訂・出版されており、英訳も出ている<sup>43</sup>。

これら四本の漢訳のうち、三巻本が最も古いものであると考えられており、その原型が支婁迦讖によって西紀 179 年に訳出されているから、大乘経典の最古層に属することになる。

般舟三昧の語義として、*pratyutpanna-buddha-saṃmukha-avasthita-samādhi*(現在諸仏の面前に立つ三昧)がチベット語訳から知られており、漢訳は次のように訳出されている。

現在仏悉在前立三昧(『三巻本』T13,904b)

十方諸仏悉在前立(『一巻本』T13,898b)

現在仏面住定意・見在仏住止定意(『拔陂経』T13,921c/923b)

思惟諸仏現前三昧(『賢護分』T13,874c)

とあり、現在・十方諸仏が面前におられ、まみえる三昧ということが共通している。テキストは三巻本を用いて、その他の漢訳、チベット語訳の和訳<sup>44</sup>、英訳をも参照しながら、「現在諸仏悉在前立三昧」とは何か、三昧の中でブッダに直接まみえるためにどのような実践法があり、そしてこの三昧を成就した人に如何なることが実現されるのか、について考察しよう。

さて、序品に相当する「問事品」において、菩薩が願い、実践しようとする三昧とは何かについての問答がある。毘陀和(bhadrāpāla)菩薩が仏に問う。

<sup>43</sup> Paul M. Harrison, *The Tibetan Text of the Pratyutpanna-buddha saṃmukhāvasthita samādhi-sūtra*, Critically edited from the Derge, Narthan, Peking and Lhasa editions of the Tibetan and Chinese versions, Reiyukai Library, Tokyo, 1978.

Paul M. Harrison, *The Samādhi of direct encounter with the buddhas of the present*, An annotated English translation of the Tibetan version of the *Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-Sūtra* with several appendices relating to the history of the text, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 1990.

<sup>44</sup> 梶山雄一 1992 「般舟三昧経—阿弥陀仏の信仰と空の思想」 『浄土仏教の思想 二』 講談社。林 純教[1994] 『藏文和訳 般舟三昧経』 大東出版社。

菩薩は何らかの三昧をなすことによって、大海、あるいは須弥山のような智慧を得られるのか。(教えを)聞くものが疑わず、愚痴の所に生まれず、去來のを知ることができるのか。…… 常に諸仏を念ずること父母の如くにして異なることなく、しだいに諸仏の威神を得、悉く諸経を理解し、そして明らかな目で見れば、一切は罣礙するところなく、諸仏は悉く面前に立っておられるのを見ることができるのか<sup>45</sup>。……

次いでブッダはこの問いに答えて、

一法行がある。常に習い持つべく、余の法に随ってはいらない。その一法行とは、名づけて、現在仏悉在前立三昧なり<sup>46</sup>。

と説いている。

大乘仏教の菩薩が願って実践しようとする三昧法とは、常に仏を念ずることにより、三昧に入り、ブッダから威神力を受け、すべての経を聞き理解し、そして智慧を得、見仏を得るに至りたい、ということがここに明らかに説かれており、それこそが現在仏が面前に立つという般舟三昧であるということが提示されている。

次の「行品」をみると、この現在仏悉在前立三昧の実践法がさらに具体的に示されている。

仏は言う。もし菩薩の念ずるところが現存すれば、その定意が十方仏に向かう。もし定意となるなら、一切にわたって菩薩の高行が得られる。定意とは何か。念仏因縁に従って、仏に向かう念意が乱されず、點を得るに従って精進を捨てず、善知識と共に空を行じ、睡眠を除いて聚会せず、悪知識を避けて善知識に近づき精進を乱されない……<sup>47</sup>。

<sup>45</sup> 菩薩當作何等三昧。所得智慧如大海。如須彌山。所聞者不疑。終不失人中之將。自致成佛終不還。終不生愚癡之處。豫知去來之事。… 常念諸佛如父母無異。稍稍得諸佛威神。悉得諸經。明眼所視無所罣礙。諸佛悉在前立。(T13.903b~903c)

<sup>46</sup> 佛告毘陀和菩薩。一法行常當習持常當守。不復隨餘法。諸功德中最第一。何等為第一法行。是三昧名現在佛悉在前立三昧。(T13.904b)

<sup>47</sup> 佛告毘陀和菩薩。若有菩薩所念現在。定意向十方佛。若有定意。一切得菩薩高行。何等為定意。從念佛因縁。向佛念意不亂。從得點不捨精進。與善知識共行空。除睡眠。不聚會。避惡知識近善知識。不亂精進。(T13.904b)

現在仏悉在前立三昧を實踐する方法とは、念仏によって、心が十方仏に向かって集中し、乱されない状況にあり、善知識に親しみ、空を行ずることである。三昧の中でまみえる仏とは、現在の十方の仏である。

心が現在の十方の仏に向かって行く立場として、經典は、「心が向かう方角に、現在する仏の名前を聞くことがあろう。常に心が向かう方角を念じて、仏を見ようと欲すれば、菩薩は一切にわたって仏を見ることを得る。」<sup>48</sup>と説いている。

さらに続けてみると、般舟三昧を得る方法の一例として、阿彌陀仏を対象にした具体的な三昧実践徳目が示されている。それをまとめてみると、

- ① 比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四部大衆を対象とする。
- ② 戒を完全に保持する。
- ③ 一人で一処に止まる。
- ④ 西方に阿彌陀仏が今現在おられることを心に念じ、あるいは聞いたことを念ずる。
- ⑤ 一心に阿彌陀仏を念ずる。一日一夜、若しくは七日七夜、心に散乱なく、阿彌陀仏を憶念するならば、七日を過ぎた後に阿彌陀仏を見る。昼間に見なければ、夢の中において見る。

このようにして三昧を實踐する菩薩は、「天眼をもって見るのではなく、天耳をもって聞くのでもなく、神足をもってその仏刹に行くのでもない。この世界にいながら阿彌陀仏を見て教えを聞いて受持する。この三昧より立ち上がってから、受持した教えを人々のために説く」といっている<sup>49</sup>。

先に触れた初期仏教における三昧が出家者の必須の實踐徳目であったのに対し、ここでは、三昧の實踐が出家者のみならず在家者にまで広げられており、戒を保つことが第一に要求されている。三昧實踐の前提条件として身心の調整が求められていることがわかる。

それでは、阿彌陀仏を念ずることというのは、どのようなものであろうか。次の四点が挙げられる。

<sup>48</sup> 佛言。菩薩如是。其所向方。聞佛名。常念所向方欲見佛。菩薩一切見佛。(T13.905c)  
<sup>49</sup> 是菩薩摩訶薩。不持天眼徹視。不持天耳徹聽。不持神足到其佛刹。不於是間終。生彼間佛刹乃見。便於是間坐。見阿彌陀佛。聞所說經悉受得。從三昧中悉能具足。為人説之。(T13.905a)

- ① 常に休息なく阿彌陀仏のことを念じつづける。
- ② 仏の三十二相好色身を念ずる。
- ③ 比丘僧の中で説法をしていることを念ずる。
- ④ くずれ破れることのないものを説くことを念ずる。

このように念仏を用いるが故に、阿彌陀仏の国に生まれることを得、または空三昧を得ることができると説いている<sup>50</sup>。

これら以外にも、「四事品」において、この般舟三昧を得る方法として、四項目ずつ四度に分けて述べられる<sup>51</sup>。

一つ目は、

- ① 誰も壊すことのできない信仰、
- ② 誰も追いつくことのできない精進、
- ③ 誰も及ぶことのできない智慧、
- ④ 常に善知識に親しむこと。

二つ目は、

- ① 三ヶ月の間、指を弾く間さえも、世間の思想を起こさないこと
- ② 三ヶ月の間、指を弾く間さえも、睡眠をとらないこと
- ③ 三ヶ月の間、指を弾く間さえも、食事とトイレのためを除いて、休息をとらないこと

<sup>50</sup> 爾時阿彌陀佛。語是菩薩言。欲來生我國者。常念我數數。常當守念。莫有休息。如是得來生我國。佛言。是菩薩用是念佛故。當得生阿彌陀佛國。常當念如是佛身。有三十二相悉具足光明徹照。端正無比在比丘僧中説經。説經不壞敗色。何等為不壞敗色。痛痒思想。生死識魂神。地水火風。世間天上。上至梵摩訶梵。不壞敗色。用念佛故得空三昧。如是為念佛。(T13.905b)

<sup>51</sup> 菩薩有四事法。疾速得三昧。何等為四。一者所信無有能壞者。二者精進無有能逮者。三者所入智慧無有能及者。四者常與善師從事。是為四。菩薩復有四事。疾得是三昧。何等為四。一者不得有世間思想。如指相彈頃三月。二者不得臥出三月。如指相彈頃。三者經行不得休息。不得坐三月。除其飯食左右。四者為人説經。不得望人衣服飲食。是為四。菩薩復有四事。疾得是三昧。何等為四。一者合會人至佛所。二者合會人使聽經。三者不嫉妬。四者教人學佛道。是為四。菩薩復有四事。疾得是三昧。何等為四。一者作佛形像若作畫。用是三昧故。二者用是三昧故。持好疋素令人寫是三昧。三者教自貢高人內佛道中。四者常護佛法。(T13.906a)

④ 人に経を説いてあげても、衣服飯食を望まないこと。

三つ目は、

- ① 人に仏を見るように勧めること、
- ② 教法を聞くように勧めること、
- ③ 嫉妬しないこと、
- ④ 仏道を学ぶように勧めること。

四つ目は、

- ① 三昧に用いるために仏の形像もしくは絵を作ること、
- ② 三昧〔教え〕を写すこと、
- ③ 貢高なる人を仏道に入らせること、
- ④ 仏法を護ること

である。

さらに続けてみると、「三昧を求める者は布施を願い、戒を持ち、清潔高行にして、懈怠を捨てる。瞋恚を生ぜず、慈心を行い、悲哀を行い、等心で憎悪がなくなれば、この三昧を久しからず得ることができる。」<sup>52</sup> または、「今、現在仏悉在前立三昧得ようとすれば、布施を具足し、戒を持ち、忍辱・精進・一心智慧・度脱智慧を身につけるべきである。」<sup>53</sup>と説かれている。

これらの実践徳目をまとめてみると、持戒、独一处、念仏、信仰、善知識に従事すること、六波羅蜜、慈悲心などが挙げられる。そして最終的には仏の威神力と三昧力と自己の以前の功德力によって、三昧を成就することができると思われる。

さて、これらの実践徳目を実践し、般舟三昧が成就されると、修行者はどのような境地に至るのか、その状況は如何なるものであろうか。

三昧を体得する者は、計ることのできない百千の仏を見る。三昧より覚めて、悉く

<sup>52</sup> 求是三昧者。所施常當自樂。與持戒當清潔高行。棄捐懈怠。疾得是三昧不久。(T13.906b)

<sup>53</sup> 今現在諸佛悉在前立三昧。布施當具足。持戒如是。忍辱精進一心智慧。度脱智慧身悉具足。(T13.904b~906c)

念見して、諸の弟子の為に説く。仏の言わく、我が眼清浄にして、常に世間を見るが如く、菩薩は是の如き三昧を得て、復た計ることのできない仏を見る。仏を見て、身相を視ない。但し十種力を視る。世間の人のように食はなく、諸の毒を消滅して清浄であり、想がない<sup>54</sup>。

または

定意自在を得て、仏の身相に随わず、如何なる人とも争わず、因縁に従って、生ずることを受け入れて、仏地に従って度する<sup>55</sup>。

三昧に入り、限りない仏に出会いまみえて、教えを受けて、三昧より立ち上がった後は、人のために説き、伝え広める。ただし仏を見るというのは、仏の相好色身に執着することなく、すべてのことが因縁として受け入れられ、仏の備える十種の徳性をひたすら身を通して感じ取ることである。ブッダが三昧の中でダンマが顕われたとき、その正覚が完成されたように、三昧中に仏を見るということは仏のみに備わる十種の智慧のはたらきが顕わになって、諸欲と無明を離れ、邪見が完全に消え、さとりが得られるということであろう。次にその状態が明らかになる。

そして三昧を成就したときの心の状態はどのようであろうか。

仏はどこから来られたのか、私はどこへ行くのか、とそう考えて、自ら仏を念ずるに、来る所もなく、至る所もない。三界を念ずるに、この三界もまた、意の為す所である。私の念ずる所、即ち心は仏となる、と見る。心は自ら、心は仏であり、心は如来であり、心は我が身である、と見る。〔したがって〕心は仏を見る<sup>56</sup>。

<sup>54</sup> 菩薩如是速得三昧者。見不可復計百千佛。從三昧中覺以悉念見。自恣為諸弟子説。佛言。如我眼清浄常見於世間。菩薩如是得三昧。以見不可復計佛。見佛不視身相。但視十種力。不如世間人有食。消滅諸毒以清浄不復想。(T13.906c)

<sup>55</sup> 定意得自在。不隨佛身相法。一切一計不與天下諍。所作不諍。從因縁生受了。從佛地度(T13.904c)

<sup>56</sup> 佛從何所來。我為到何所。自念佛無所從來。我亦無所至。自念三處。欲處。色處。無想處。是三處意所為耳。我所念即見。心作佛。心自見。心是佛。心是怛薩阿竭。心是我

どこからでもなく、どこへでもない、仏を念ずる三昧の中で、仏という法身が顕わになるとき、心(身)すなわち五蘊と仏が一体になって、法身仏を見る。したがって、「心に想があれば、癡となす。心に想がないのを涅槃とする。」<sup>57</sup>と説かれる。

このように三昧を完全に成就した後も、経巻を聞いて悉く受持し、精進してつとめ、この三昧を人に語り、展開させて、相伝するようにして、長く存続させることが要請されている<sup>58</sup>。

以上見たように、般舟三昧とは、念仏による三昧の中で十方に現在する仏に出会い、教えを受けて、身体を通して仏の徳性、すなわち法身仏が顕わになるとき、諸欲と無明を離れ、疑惑が完全に消え、涅槃が得られるということであろう。この三昧を成就する過程をみると、まず、戒を調べ、一人で閑静なところで坐り、ひたすら念仏しつづけ、煩惱をなくし、三昧に入り、仏の威神力に助けられて法身仏を見るということである。

初期大乘仏教の菩薩の実践法として、見仏のための念仏による三昧が強調されている。

#### 4. 首楞嚴三昧

首楞嚴三昧とは、その名を冠した『首楞嚴三昧経』に詳説されており、より高次の菩薩のみ得られるという大乘仏教の最も重要な三昧とされる。現存する『首楞嚴三昧経』は漢訳とチベット語訳、僅かな断片のサンスクリット本、及びコータン語訳の断片が知られている。なお、サンスクリット断片は漢訳とチベット語訳の相違する部分では、その多くが漢訳に一致していると報告されている<sup>59</sup>。

身。見佛。(T13.905c~906a)

<sup>57</sup> 心有想為癡。心無想是泥洹。(T13.906a)

<sup>58</sup> 佛言。如我比丘阿難點慧聞經即受持。菩薩如是逮得是三昧。以聞不可計經卷悉受持。(T13.906c)

<sup>59</sup> 松田和信[1987]「中央アジア出土『首楞嚴三昧経』梵文写本残葉」『仏教学セミナー』

漢訳は2世紀末から、その後5世紀初頭に至るまで、九回にわたって訳出されたと伝えられているが、ただ最後の鳩摩羅什によって訳出された(402-412)ものだけが現存している。それが『仏説首楞嚴三昧経』二卷(T.15, 629-645)である。その初訳が西暦186年に支婁迦讖によって訳出されたと知られているので、この『首楞嚴三昧経』も大乘経典の最古層に属することになる。

首楞嚴三昧の語義として、Śūraṅgamasamādhi(猪突猛進の三昧)がチベット語訳から知られており<sup>60</sup>、漢訳は勇伏三昧、健相三昧、健行三昧などとも訳出される。

『首楞嚴三昧経』は上・下二巻になっているが、上巻は主に堅意菩薩とブツダとの問答を通して、首楞嚴三昧の徳性や威力を明かしており、下巻は弥勒や文殊などの大菩薩、舍利弗や阿難などの仏弟子、種々のすぐれた天子たち、さらに魔王までも登場して、彼らとの間の多くの問答を通して、首楞嚴三昧の特徴や性格が明らかにされている。

では上巻において、堅意菩薩が、「菩薩が諸々のすぐれた功徳を示現することができ、畢竟、般涅槃に入る事のない三昧とは、如何なるものでしょうか」という質問に対して、ブツダは答えて、それは「首楞嚴三昧」であるとはじめて明かす<sup>61</sup>。

首楞嚴三昧は、初地、二地、三地、四地、五地、六地、七地、八地、九地の菩薩の能く得る所に非ず。唯だ、十地に住在する菩薩のみに有って、乃ち能く是の首楞嚴三昧を得るなり<sup>62</sup>。

また、

首楞嚴三昧は、一事、一縁、一義を以って知るべからず。一切の禅定、解脱、三昧、

46, p.70.

<sup>60</sup> 舟治昭義[1974]『大乘仏典 7』, 中央公論社, p.183.

<sup>61</sup> 唯然世尊。行何三昧。能令菩薩示現如是諸功徳事而不畢竟入於涅槃 ... 吾當為汝説諸菩薩成就三昧。得是功徳復過於此。堅意白佛言。願樂欲聞。佛告堅意。有三昧名首楞嚴。(T15.630a)

<sup>62</sup> 首楞嚴三昧。非初地二地三地四地五地六地七地八地九地菩薩之所能得。唯有住在十地菩薩。乃能得是首楞嚴三昧。(T15.631a)

神通、如意、無礙智慧、皆攝して首楞嚴の中に在り。譬えば、陂泉江河の諸流は、皆な大海に入るが如し。是の如く菩薩のあらゆる禪定は、皆首楞嚴三昧に在り。譬えば、轉輪聖王は大勇將有って、諸の四種の兵が、皆悉く随従するが如し。堅意よ、是の如く、有らゆる三昧門、禪定門、弁財門、解脱門、陀羅尼門、神通門、明解脱門、是の諸の法門は悉く皆攝して首楞嚴三昧に在り。随って、菩薩有って首楞嚴三昧を行ずれば、一切の三昧は皆悉く随従す。堅意よ、譬えば、轉輪聖王の行く時、七宝も皆従うが如く、是の如く、堅意よ、首楞嚴三昧に一切の助菩提法が皆悉く随従す。是の故に、此の三昧を名づけて、首楞嚴と為すと<sup>63</sup>。

首楞嚴三昧は、十地にいたった菩薩のみがはじめて得られるのである。ゆえにこの三昧に入ることによって大乘の菩薩はさまざまな功德を悉く備え、菩薩行を完成することができる。さらにあらゆる三昧門、解脱門、陀羅尼門などの一切法門並びに一切の菩提法をすべて摂めているから、首楞嚴(sūramgama)すなわち「猪突猛進」という名がつけられたのである。

より高次の首楞嚴三昧を実践しようとする時、まず凡夫法を修行することが勧められており<sup>64</sup>、また「菩薩が諸法の空を觀じ、障礙する所無く、念念に滅尽して、憎愛を離れば、是れをこの三昧を修すると名づく<sup>65</sup>。」と説いていることから、その根底には、空觀が中心としてある。そして現実の日常生活から菩薩行への関心が寄せられているということがわかる。これは三昧を実践する階層がより広められたということであろう。

現実の世界からその実践の出発とする首楞嚴三昧を学ぶために順次に実践す

<sup>63</sup> 首楞嚴三昧。不以一事一縁一義可知。一切禪定解脱三昧。神通如意無礙智慧。皆攝在首楞嚴中。譬如陂泉江河諸流皆入大海。如是菩薩所有禪定。皆在首楞嚴三昧。譬如轉輪聖王有大勇將諸四種兵皆悉隨從。堅意。如是所有三昧門禪定門辯才門解脱門陀羅尼門神通門明解脱門。是諸法門悉皆攝在首楞嚴三昧。隨有菩薩行首楞嚴三昧。一切三昧皆悉隨從。堅意。譬如轉輪聖王行時七寶皆從。如是堅意。首楞嚴三昧。一切助菩提法皆悉隨從。是故此三昧名為首楞嚴。(T15.631c~632a)

<sup>64</sup> 爾時堅意菩薩問現意天子言。菩薩若欲得是三昧。當修行何法。天子答言。菩薩若欲得是三昧。當修行凡夫法...。(T15.636a)

<sup>65</sup> 菩薩若能觀諸法空無所障礙。念念滅盡離於憎愛。是名修是三昧。(T15.643b)

べき段階が列挙される<sup>66</sup>。

- ① 愛樂心を学ぶ。
- ② 深心を学ぶ。
- ③ 慈・悲・喜・捨の四聖梵行を学ぶ。
- ④ 五神通を学ぶ。
- ⑤ 六波羅蜜を成就する。
- ⑥ 方便に通達する。
- ⑦ 第三柔順忍に住し、無生法忍を得、諸仏の授記を受ける。
- ⑧ 第八地に入り、諸仏現前三昧を得る。
- ⑨ 一切仏法の因縁を具足し、(生)家の種姓を具える。
- ⑩ 十地を具足し、仏の職号を受け、菩薩の一切三昧乃至首楞嚴三昧を成就する。

このように、菩薩は十段階にわたってその実践を深めていくが、第八地に至って般舟三昧が得られ、ブツダとの対面を通してその徳性が身に備えられる。そして十地に至って菩薩行が完成され、首楞嚴三昧が成就される。だからこの三昧を実践することが甚だ難しいので、わずかな菩薩だけがこの三昧に住し、多くの菩薩は他の三昧を行ずると説かれる<sup>67</sup>。

さて、これらの実践徳目を実践し、すでに首楞嚴三昧が得られたとして、その境地は如何なるものであろうか。その徳性を大体7項目にまとめてみると<sup>68</sup>。

<sup>66</sup> 先當學愛樂心。學愛樂心已當學深心。學深心已當學大慈。學大慈已當學大悲。學大悲已當學四聖梵行。所謂慈悲喜捨。學四聖梵行已。當學報得最上五通常自隨身。學是通已。爾時便能成就六波羅蜜。成就六波羅蜜已。便能通達方便。通達方便已得住第三柔順忍。住第三柔順忍已得無生法忍。得無生法忍已諸佛授記。諸佛授記已能入第八菩薩地。入第八菩薩地已得諸佛現前三昧。得諸佛現前三昧已常不離見諸佛。常不離見諸佛已能具足一切佛法因縁。具足一切佛法因縁已能起莊嚴佛土功德。能起莊嚴佛土功德已。能具生家種姓。能具生家種姓已。入胎出生。入胎出生已能具十地。具十地已。爾時便得受佛職號。受佛職號已便得一切菩薩三昧。得一切菩薩三昧已然後乃得首楞嚴三昧。(T15.633c~634a)

<sup>67</sup> 是三昧者修行甚難。佛告名意。以是事故。少有菩薩住是三昧。多有菩薩行餘三昧。(T15.643c)

<sup>68</sup> 菩薩住首楞嚴三昧。六波羅蜜世世自知不從他學。舉足下足入息出息。念念常有六波羅蜜(T15.633b)。菩薩住首楞嚴三昧。於一切法無所復學(T15.634a)。若菩薩住首楞嚴三昧

- ① 六波羅蜜を世世自ら知って、他より学ばず、举足、下足、入息、出息、念念するところに、常に六波羅蜜がある。
- ② 一切法において学ぶ所なし。
- ③ 一切の菩薩法と仏法とを知る。
- ④ 諸々の声聞、辟支仏行と一切衆生の行とにおいて自然に観ずるようになる。
- ⑤ ブッダの境界に入って、智慧自在になる。
- ⑥ その功德が不可思議であり、究境の仏道をなして、智慧、神通の諸明を成就する。
- ⑦ 三昧の自在神力により、涅槃を示すが、畢竟して滅することがない。

この他にも、百項目をもって首楞嚴三昧の徳性が述べられ、これらがブッダのあらゆる威神力を示し、衆生に多くの利益を与えると結んでいる<sup>69</sup>。

ここでは確かに首楞嚴三昧の境地とブッダの境地とが同一視されており、この三昧の威神力により、方便として涅槃を示すのみであり、永遠に涅槃に入ることがないと強調する。

たとえば、文殊菩薩は首楞嚴三昧に住して、希有の難事を現じた。須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢となり、声聞、辟支仏となって、因縁の衆生を教化するために、涅槃を示し、三昧力の故に、還って再生し、賢聖の行を行じたが、しかもその中に住することがないと説いて<sup>70</sup>、この三昧を実践する理想的なイメージとして文殊菩薩をとりあげ、高く評価している。

者。悉知一切諸菩薩法一切佛法(T15.634a)。菩薩如是住首楞嚴三昧。於諸聲聞辟支佛行及諸一切衆生之行。自然能觀(T15.634b)。若人得是首楞嚴三昧。當知是人入佛境界智慧自在(T15.636a)。若人得是首楞嚴三昧。是人功德不可思議。所以者何。是人則為究竟佛道。成就智慧神通諸明(T15.636a)。是皆首楞嚴三昧自在神力。菩薩示現入於涅槃不畢竟滅(T15.640b)。

<sup>69</sup> 何等是首楞嚴三昧。謂修治心猶如虛空(一) ... 轉於法輪(九十九)。入大滅度而不永滅(一百)。(T15.631a~631c)

<sup>70</sup> 文殊師利法王子住首楞嚴三昧。能作如是希有難事。菩薩住此三昧。為作信行而不隨他信。亦作法行。而於法相轉於法輪不退不失。亦作八人。於諸無量阿僧祇劫。為八邪者而行於道作須陀洹。為生死水漂流衆生。不入法位作斯陀含。遍現其身於諸世間。作阿那含。亦復來還教化衆生作阿羅漢。亦常精進求學佛法亦作聲聞。以無礙辯為人說法作辟支佛。為欲教化因縁衆生示入涅槃。三昧力故還復出生。諸天子。菩薩住是首楞嚴三昧。皆能遍行諸賢聖行。亦隨其地有所說法而不住中。(T15.642c~643a)

さらに悪魔及び五逆罪を犯した人でも、首楞嚴三昧を聞き、菩提心を起こしたならば、それらの善根によって、あらゆる魔事、あらゆる魔行を捨て去り、やがて次第に首楞嚴三昧を得て、菩提を成就するであろうと、ブッダが授記し、魔界と仏界とは不二であることが示される<sup>71</sup>。

これを大乘『涅槃經』とのかかわりの中で考えてみれば、『涅槃經』には『首楞嚴三昧經』が引用されており、その箇所には、極悪人の一闍提にも仏性があり、将来必ず仏性は顕現し、菩提を成就することができる。仏性とはあらゆる煩惱を断ち切る首楞嚴三昧のことである。ブッダはこの三昧の威力によって常樂我淨を得た。また人々もみな首楞嚴三昧を実践すれば仏性を見るが、彼らは修行しないのでこの事実を見ることができない。だからブッダの最高の菩提を成就することができないと説かれている<sup>72</sup>。

『涅槃經』では仏性と首楞嚴三昧とが同一視されており、ブッダのように、この三昧力によって仏性は身体を通して顕現される。これこそが首楞嚴三昧の成就であり、最高の菩提を成就することであるとされる。

この関連性から、仏性という考えが、もうすでに『首楞嚴三昧經』においても、芽生えていたと考えられる。この経においては、ブッダは方便として涅槃を示すだけであり、永遠に涅槃に入ることがないという如来常住性の意味がみられ、それを『涅槃經』は首楞嚴三昧を通して仏性が衆生に内在するという考えに位置づけた。

<sup>71</sup> 今此惡魔聞說首楞嚴三昧。為解縛故發菩提心。亦得具足佛法因縁耶。佛言。如汝所說。惡魔以是三昧福德因縁及發菩提心因縁故。於未來世。得捨一切魔事魔行魔詔曲心魔衰惱事。從今已後。漸漸當得首楞嚴三昧力。成就佛道。堅意菩薩。謂惡魔言。如來今已與汝授記(T15.638c)。世尊。我今自於所有眷屬不得自在。以聞說是首楞嚴三昧故。況餘聞者。若人得聞首楞嚴三昧。即得畢定住佛法中。爾時天女以無怯心語惡魔言。汝勿大愁。我等今者不出汝界。所以者何。魔界如即是佛界如。魔界如佛界如不二不別(T15.639c)。世尊。人寧作五逆重罪。得聞說是首楞嚴三昧。不入法位作漏盡阿羅漢。所以者何。五逆罪人聞是首楞嚴三昧。發阿耨多羅三藐三菩提心已。雖本罪緣墮在地獄。聞是三昧善根因縁還得作佛。(T15.643a)

<sup>72</sup> 一闍提等悉有佛性。何以故。一闍提等定當得成阿耨多羅三藐三菩提故 ... 佛性者即首楞嚴三昧性如醍醐。即是一切諸佛之母。以首楞嚴三昧力故。而令諸佛常樂我淨。一切衆生悉有首楞嚴三昧。以不修行故不得見。是故不能得成阿耨多羅三藐三菩提。(T12.524c)

最後にこの首楞嚴三昧の教えを聞き、受持し、読誦し、人のために語り、実践することにつとめれば、何よりも勝る高次の三昧力によって、菩提へ導かれ、退転することがなくなると説かれており<sup>73</sup>、この三昧の実践を勧めることが要請されている。

以上、首楞嚴三昧について検討してきた。ここにこれまでの内容を要約すると、首楞嚴三昧とは、

- ① 菩薩行の完成である。
- ② 六波羅蜜を完全に知り、一瞬でも離れないことである。
- ③ ブッダとの不二の境地である。
- ④ 永遠に涅槃に入ることなく衆生に利益を与える。

ということになるであろう。

なおこの三昧を得るための具体的方法や特有の徳性が説示されていないが、これは般舟三昧とは大いに異なる点である。

## 5. まとめ

三昧は、仏教以前からインドで伝わってきた、心一境性を伴う宗教的実践法であった。その流れを受け継いだ仏教においても出家修行者の必須の実践徳目とされたが、心一境性を目的とするものではなく、涅槃へ導くものとして捉えられた。時代と共に三昧の体系は、系統的段階的になり、独自の内容として止と観が形成されるにいたる。

そのような伝統を受けつつ、西紀1世紀前後に、大乘仏教の思想運動に伴い、新たな菩薩行の基本が出現してくるのである。諸法の姿を空として捉え、そのありのままに見る心によって、ひたすら仏を憶念しつづけ、三昧に入り、仏を体感し、仏の威神力に助けられて法身仏と一体化するという般舟(見仏)三昧が

<sup>73</sup> 若有衆生聞是首楞嚴三昧。即能信受讀誦解義。為人演說如說修行。當知是人得住佛法畢定不退。(T15.641a)

確立される。

また、六波羅蜜の実践を通して、菩薩行が完成される十地の菩薩のみが仏の威神力に助けられて仏の境地に入り、永遠に涅槃に入ることなく衆生に利益を与えるという首楞嚴三昧がある。

ここで見る限り、般舟三昧は実践の具体的方法や特有の徳性が提示され、現実感があり、自利の段階であることが窺える。一方、首楞嚴三昧は大乘菩薩行の完成が示され、利他の重視がみられる。すなわち、実践法としては般舟三昧であり、理想としては首楞嚴三昧であろう。

止観にたとえていえば、止に入り、般舟三昧が得られ、法身仏を見る。観に入り、首楞嚴三昧が得られ、衆生を見る、というのが大乘仏教特有の三昧観であると考えられる。おそらくすでに菩提心のなんたるかを知り、それを自らの行動の原動力とする者の実践の在り方を描くものであろう。

## \* 略号一覧

略号	文献名	
<i>Sn.</i>	Suttanipāta	PTS 本
<i>Dhp.</i>	Dhammapada	PTS 本
<i>Therag.</i>	Theragāthā	PTS 本
<i>Ud.</i>	Udāna	PTS 本
<i>AN.</i>	Aṅguttaranikāya	PTS 本
<i>DN.</i>	Dīghanikāya	PTS 本
<i>MN.</i>	Majjhimanikāya	PTS 本
<i>SN.</i>	Saṃyuttanikāya	PTS 本
<i>Vism.</i>	Visuddhimagga	PTS 本
<i>Aṣṭ.Pr.</i>	Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā	Vaidya, P. L. (ed)
<i>Gv.</i>	Gaṇḍavyūhasūtra	Vaidya, P. L. (ed)
<i>Daśabhūmi.</i>	Daśabhūmiśvaro nāma mahāyānasūtra	Kondō, R. (ed)
T	『大正新脩大藏經』	